

遺跡でたどる 袋井のあゆみ

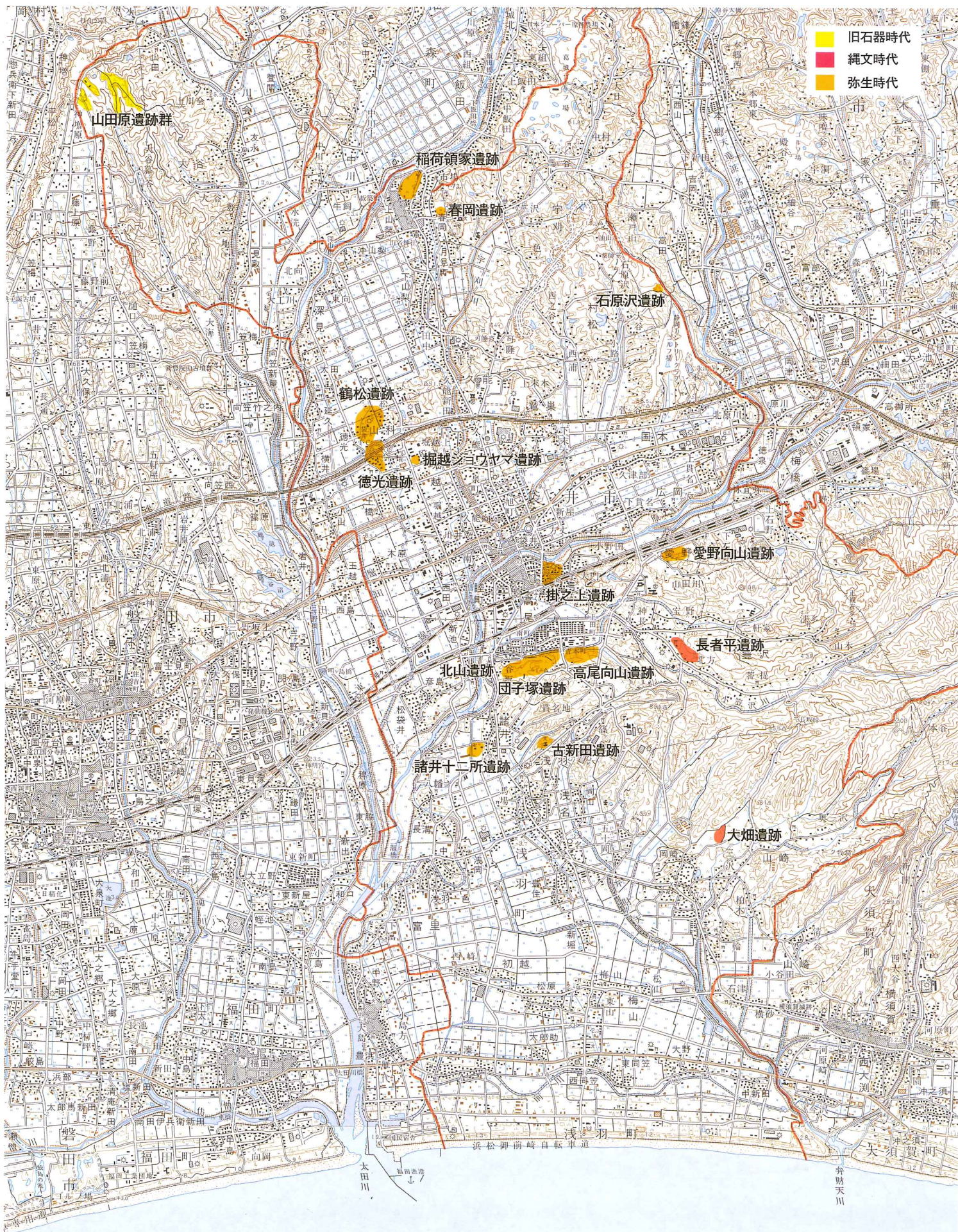
第1弾

旧石器時代～弥生時代の巻



袋井市教育委員会 袋井市立浅羽郷土資料館

袋井市域の主要遺跡



人々が住みはじめたころ

市内最古の遺跡は、磐田原台地の上、三川の山田原遺跡から1万5千年前にさかのぼる集落跡が見つっています。
今からおよそ1万年前までを旧石器時代と呼び、人々は狩りを中心とした生活を送っていました。

狩りの道具は主に石で作られ、硬い木の棒や獣の角、骨なども利用されました。山田原遺跡からは昭和58年(1983)の発掘調査によって、バーベキューの跡と考えられる焼石のかたまり(礫群)、火を焚いた跡と考えられる炭化物のかたまり(炭化物集中域)、石器、石器を作るときに飛び散った破片などがたくさん発掘されました。

これらに隣接して家が建てられていたのでしょう。当時の家は動物の毛皮などを張りあわせたテントのような家だったと思われます。山田原遺跡で暮らしていた人々は、季節が変わると小さな集団をつくって獣を追い、食料を求めて移動したようです。



▲遺物や礫群が掘り出されたところ



▲炭化物のかたまり(バーベキューの跡?)

表土

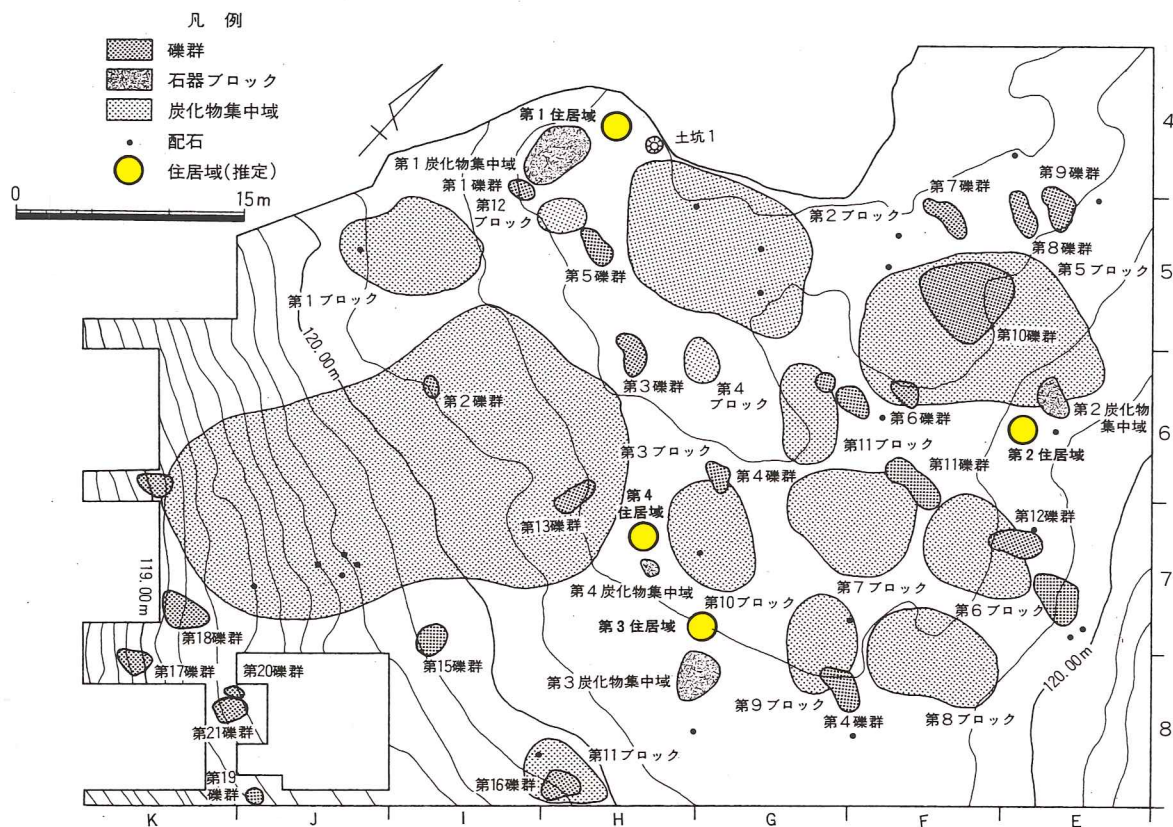
黒色土(クロボク)
縄文時代包含層

黒褐色土
旧石器時代包含層

赤黄色層
旧石器時代包含層



▲土層断面



▲山田原遺跡 集落景観の復元

礫群・石器ブロック(石器製作場所)・炭化物集中域の分布をもとに、集落の景観を復元したもの。炭化物の集中域を炉跡と考えると、4ヶ所の住居域が復元できる。



▲石核(石器の石材)・局部磨製礫



▲第5礫群のジオラマ

礫(火を受けている)は実物を使用



山田原遺跡

▲ナイフ型石器



▲槍先形尖頭器・彫器・削器・搔器

縄文人の暮らしと生活圏

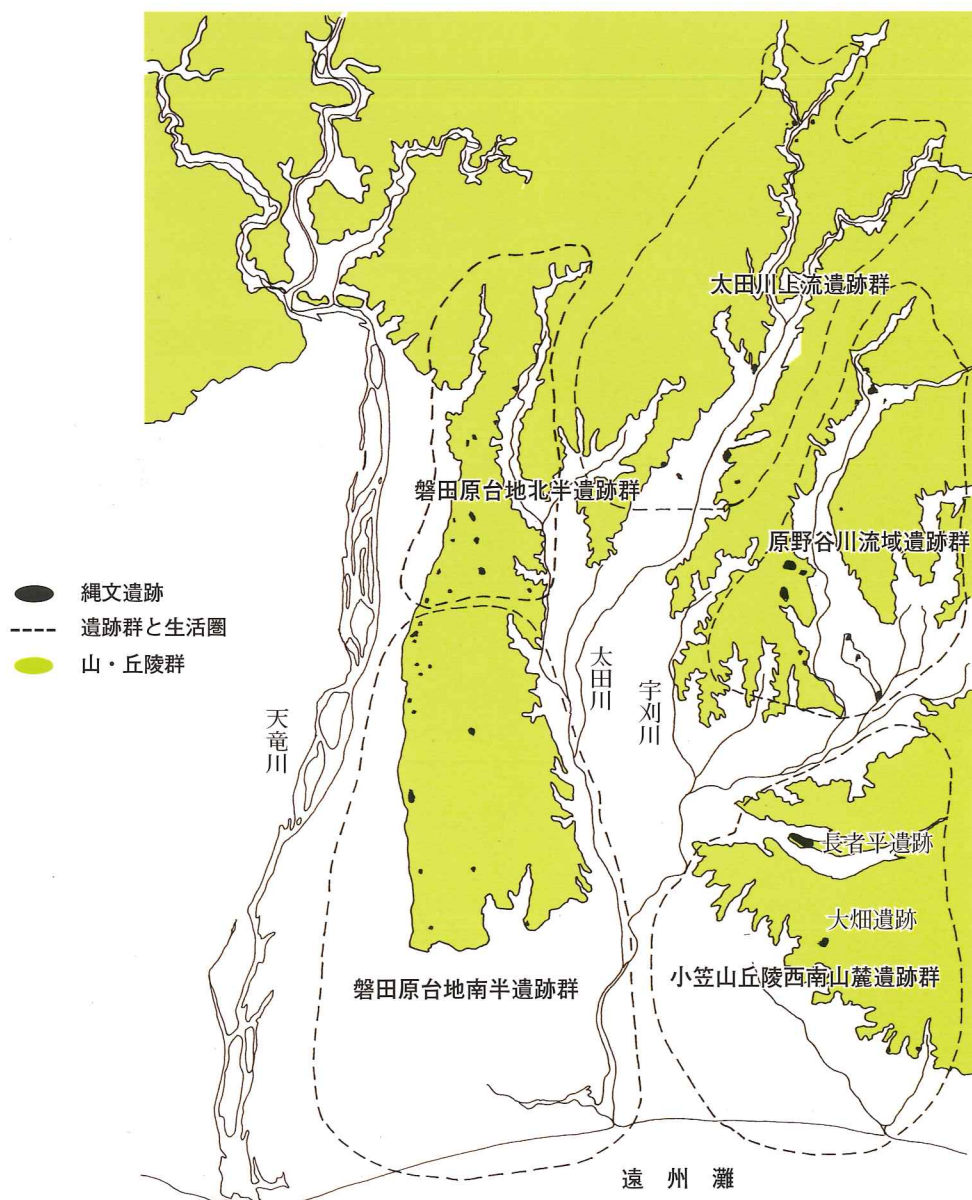
今から1万2千年前ころ、最も古い土器が使われ出しました。この土器を縄文土器と呼んでいます。縄文は、細い縄(紐)を粘土に押し付け、回転させてできた文様のことです。

土器の出現によって、人々は容易に食物を煮ることができるようになり、調理できる食物の数が増えました。その結果、栄養価が高まり、生活は安定し人口も増えました。土器作りは、弓矢とともに、縄文人の画期的な発明だったのです。

縄文人は集落の人々全員が協力し、狩りや漁、木の実を採集して暮らしていました。

太田川・原野谷川流域の丘陵地や台地上には60ヶ所以上の縄文時代の遺跡が分布し、それらは山の尾根や川筋を境にして、大きく5つの地域的なまとまりをつくっています。

この中には、大きな集落もあれば、土器や石器が数点だけ出土する小さな遺跡も含まれています。こうした遺跡群は同じ時代のものではなく、一つの集落の長い年月にわたる移住や、漁や狩り場でのキャンプの結果形づくられたもので、縄文人の日常的な生活圏と考えられます。しかし、これを見ても袋井市域に存在する集落の数がきわめて限られていたことがわかります。



▲縄文遺跡の分布と生活圏

調査で明らかとなった縄文集落（長者平遺跡・大畑遺跡）

袋井市域で見つかった集落跡には長者平遺跡と大畑遺跡があり、共に小笠原丘陵の西南山麓に位置しています。

長者平遺跡は昭和53年以来続いた発掘調査によって、今から約5千年前に集落が営まれ、4千年前には遠江でも有数の大集落に発展しましたが、3千5百年前に突然人々がいなくなり廃絶したことがわかりました。

集落は、住居、墓地、祭り場、広場、集会所などから成り立ち、掘り出された6棟の竪穴住居跡はすべて円形でした。住居は2棟がセットとなり、広場を取り囲むようにして、段丘の縁に分布していました。

岡崎の大畑遺跡からは、貝塚が見つかっています。コイやウナギなどの内陸魚の他に、エイ・ニシン・ボラ・スズキ・クロダイ・カレイ・マグロなどの沿岸、外洋に棲む魚の骨も多く含まれています。

土坑と呼ばれる墓穴からは手足を折り曲げて葬る屈葬人骨が出土し、竪穴住居の隣に埋葬された犬の骨も見つかりました。



▲長者平遺跡 全景(南より)



▲長者平遺跡 昭和53年度 東区発掘調査のようす



▲長者平遺跡 姿をあらわした竪穴住居跡



▲長者平遺跡 炉跡(中に焼土がみられる)



▲大畑遺跡 昭和56年度 南調査区のようす



▲大畑遺跡 昭和62年度 調査地全景

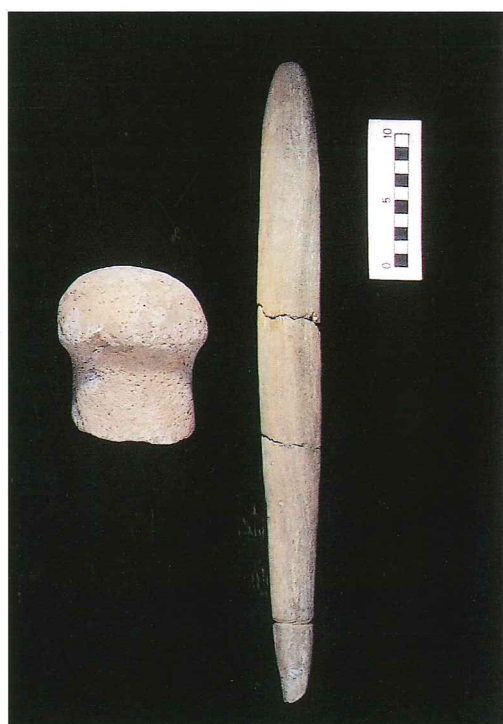


▲大畑遺跡 母子の人骨（昭和55年度調査）



▲大畑遺跡 埋葬された犬

長者平・大畑遺跡の出土品



▲長者平遺跡 石棒(左) 石剣(右)



▲石錘・土錘（魚を採る網のおもり）



▲いろいろな石器
磨製石斧・打製石斧・石匙(獣の皮を剥ぐ)・石鎌(やじり)



▲縄文土器(約5000年前)



▲縄文土器(約3000年前・約4500年前)

稲作の伝播と低地への進出

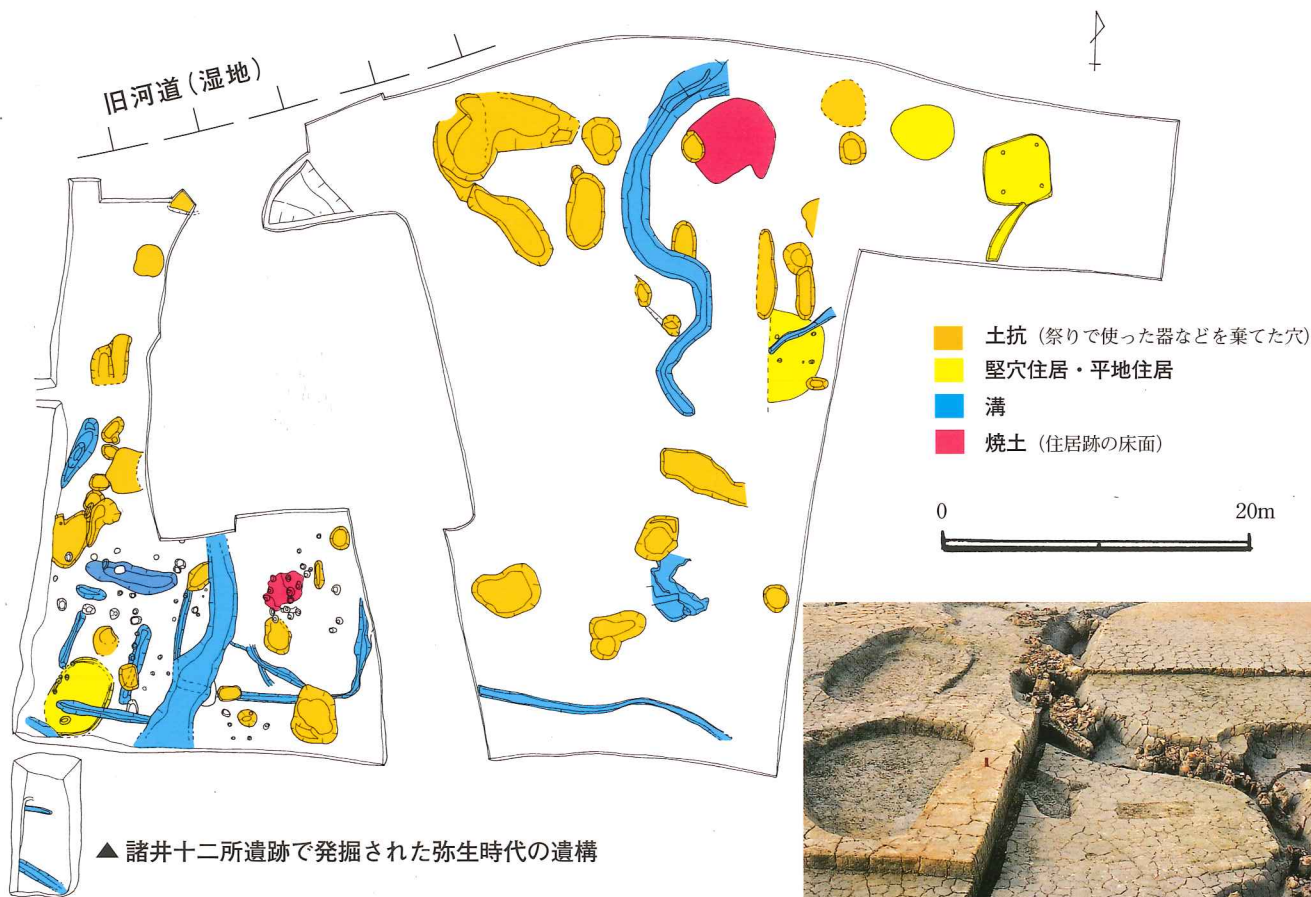
紀元前3世紀ころ北部九州に稲作が伝えられると、袋井市域でも今までとは生活のようすがしだいに変わり、集落は沖積地に面した低い丘陵や台地上に営まれるようになります。

原野谷川・太田川流域には稲作にとって都合のよい湿地が形成され、^{もみ じか ま} 粃を直播きする初期の水田が営まれましたが、生産性は低く、集落の数も限られていました。

2, 3世紀ころになると、竪穴住居の数も飛躍的に増え、灌漑用の水路を思わせる溝がたくさん掘られます。木製農具には鉄製工具による加工痕が見られますが、やがて鉄鎌が登場し、鍬や鋤先に鉄の刃をつけるようになると、乾いた土地の耕作も可能となりました。

耕地が拡大すると、人口も急激に増加し、小河川の流域にまで集落が営まれるようになりました。肥沃な水田地帯をひかえた原野谷川・太田川流域には、多くの人々が集中して住むようになり、複数の集落が協力して水稻耕作を行うようになります。それは地域的な指導者の出現を必要とし、新しい社会秩序の芽生えでもありました。

また、この頃には稲作に不便な丘陵の斜面にも、高地の集落が形成されることから、『魏誌』^{ぎ し とう い でん わ じん の じょう} 東夷伝倭人条に「倭国大乱」と記されたような、集落どうしの争いがしばしば起きていたのかもしれません。



▲ 諸井十二所遺跡

溝の中からは祭りに使った土器が多量に捨てられた状態で見つかった。



▲愛野向山遺跡（丘陵の斜面に営まれた集落）

『魏誌』東夷伝倭人条の「倭国大いに乱れる」の記事をうかがわせるような、高地に営まれた集落



▲愛野向山遺跡 小銅鐸の出土のようす

木棺墓群の棺上から、ガラス小玉・極小偏平片刃石斧・有孔偏平礫・破碎土器とともに出土した。

銅鐸のまつり

弥生時代の祭りの道具を代表するものに銅鐸があり、袋井市域からは掛之上遺跡と愛野向山遺跡の2ヶ所で出土しています。一般の銅鐸は人々の生活とは隔絶した場所に、埋納土坑を伴い厳格に埋められる場合が多く、集落全体に関わる農耕の祭りに係わる道具と考えられています。これに対し小銅鐸は、溝・住居跡・墓・井戸というように、銅鐸と同じような埋納方法を示すものはありません。このことから、小銅鐸の祭りは家族や個人の祭り、例えば悪霊や病魔の祓いに用いられたのではないかと考えられています。



▲掛之上遺跡の復元銅鐸（高さ52cm、幅27cm）

9次調査で、破片として出土した。類似する浜松市細江の穴ノ谷銅鐸(近畿式)をモデルにして復元した。



▲愛野向山遺跡 小銅鐸（高さ7.5cm）

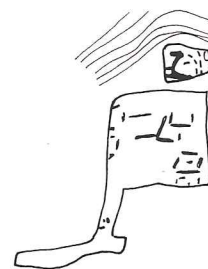
銅鐸に麻の紐を巻き付けて舌に転用している。紐の内側頂部には摩擦痕があり、実際にぶら下げて鳴らしていたことがわかる。銅鐸は3.5cm。



▲春岡遺跡 水田畦畔からの木製品出土のようす



▲堀越ジョウヤマ遺跡 長柄鋤出土のようす



▲団子塚遺跡の方形周溝墓群

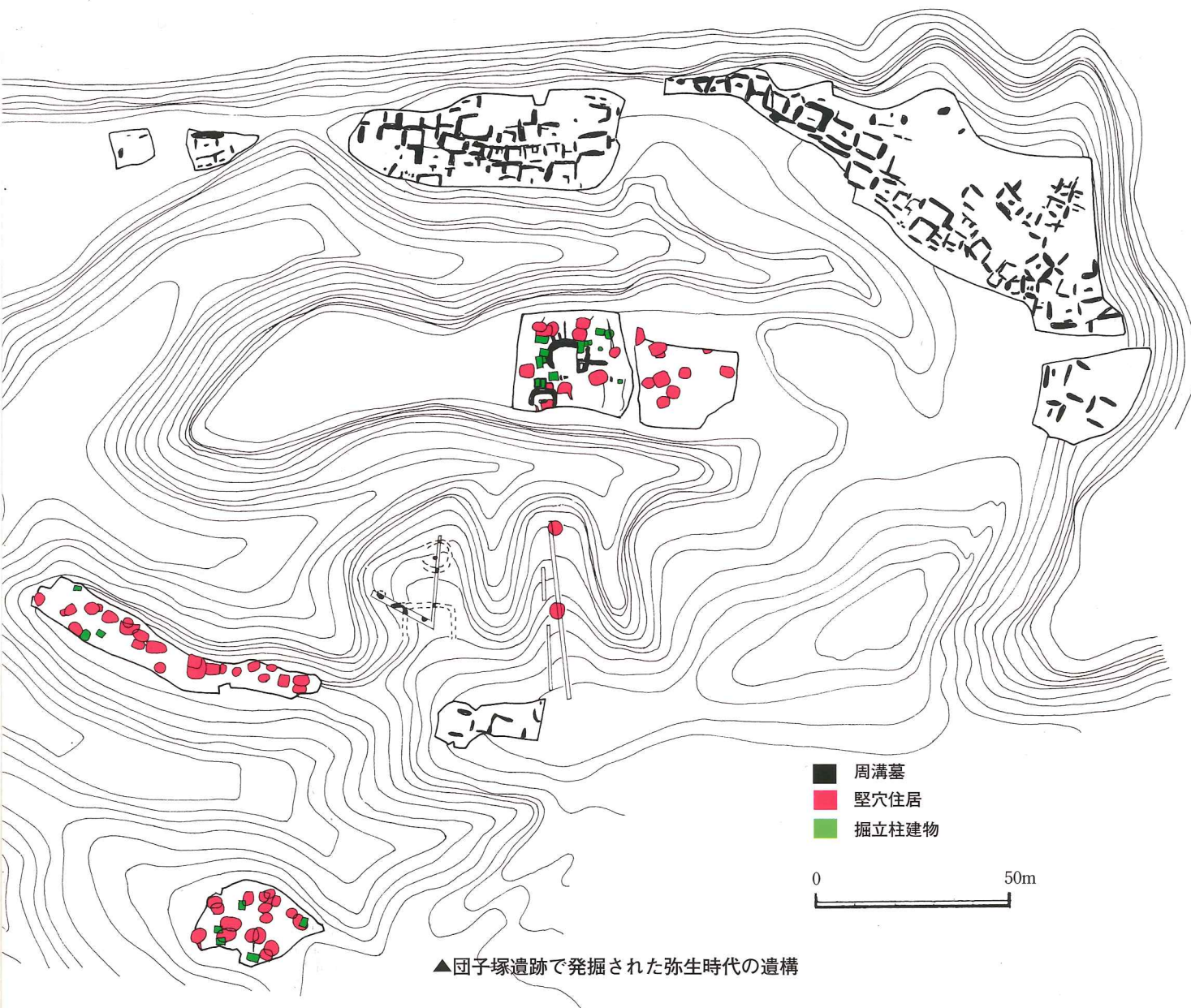
群をなす墓

弥生時代の墓には、大きく土坑墓・土器棺墓・方形周溝墓の3つの形態があり、袋井市域からもたくさんの墓が見つかっています。それぞれの特徴を整理してみましょう。

土 坑 墓 一般的なのが土坑墓と呼ばれる墓で、地面に浅い穴を掘り、死者を埋葬するものです。集落の中や、周溝墓のまわりに、まとまって築られました。

土 器 棺 墓 土器を棺として用いた墓で、壺や甕の口を合わせ、中に人骨を納めます。小さな土器ですから、人をそのまま納めるのではなく、一度埋葬し白骨化した人骨を葬りなおしたものと考えられています。集落の一画や近くの丘陵斜面にまとまって築られました。

方形周溝墓 1辺10mほどの四角い溝をめぐるし、その内側に死者を埋葬したものです。円形や不規則な形の溝で囲ったり、四隅が途切れたりとは形は少しずつ異なりますが、溝の内側には土が盛られていたようです。周溝墓は数十基がまとまり、集落に隣接して築られています。

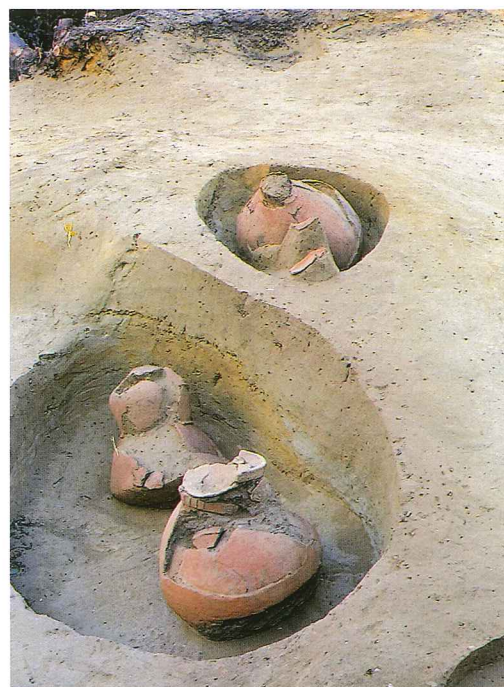


▲団子塚遺跡で発掘された弥生時代の遺構



▲北山遺跡 1号墓から出土した管玉(赤色凝灰岩・灰青色凝灰岩)

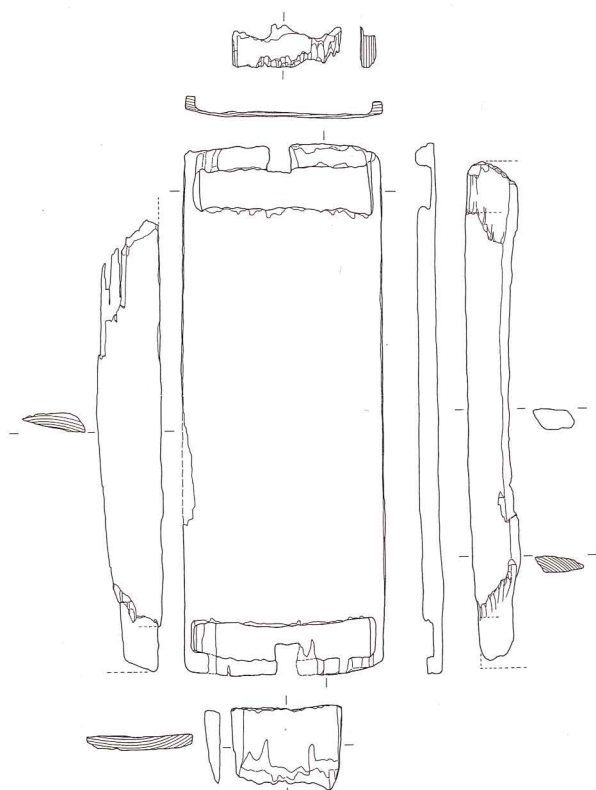
周溝墓から副葬品が発見されることはほとんどないが、北山遺跡の1号墓からは、木棺床の3分の2の範囲に丹が撒かれ、死者の胸のあたりから262点が出土した。



▲石原沢遺跡の土器棺墓群

徳光遺跡出土の木棺

平成14年7月に、個人住宅の浄化槽設置作業中に見つかりました。発掘調査に伴うものではありませんが、方形周溝墓の中心部に納められていたものと考えられます。弥生時代中期～後期にかけての時代と推定しています。



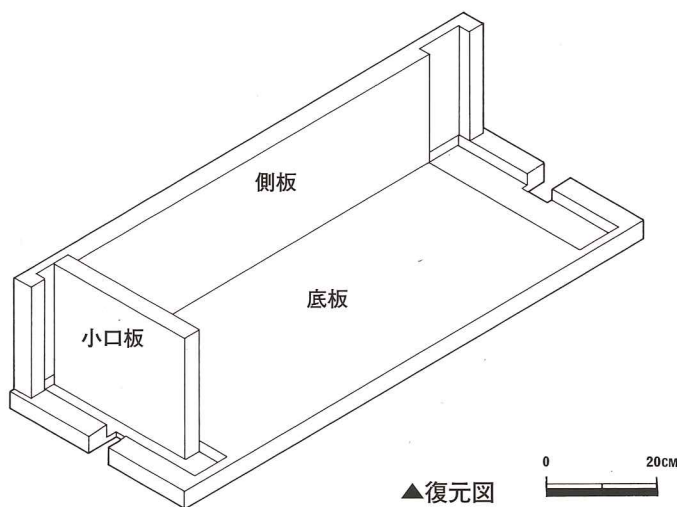
▲実測図 0 20cm



【木棺の形状・規模】

蓋以外の、全ての部材が揃い、特に底板はほぼ完全に残っています。長さ190cm、幅70cm、厚さ7cmのコウヤマキの一枚板。底板には2ヶ所に小口板を立てるための溝を掘り込んでいます。

小口板は幅40cm、高さ31cm、厚さ5.5cm前後で、小口板を立てた場合の内法は160cmあります。この木棺の特徴は、底板の両小口部中央に10×10cmほどの方形の切り込みが存在することで、これは小口板の安定を図るために、杭などを設置するため設けられた孔と考えられます。



▲復元図 0 20cm

遺跡でたどる袋井のあゆみ

第1弾 旧石器時代～弥生時代の巻

編集 袋井市生涯学習課 文化財係 山本義孝

本書は、袋井市立浅羽郷土資料館の企画展（平成17年9月17日～11月13日）を契機に編集した文化財啓蒙資料です。